花　山　夜　話

1932年——歳は更れば，降る雪は尙止まず．見渡せば，滿目，是れ皆白皚々たる積雪に，或は淡く，或は强く，五色に輝く星の光を脊に受けて，獨り我を忘れ，社會を忘れ，遂には我が地球をも全く忘却して，其目を遙かに永遠の彼方に馳する者——人の世に彼程氣高く，又彼程平和な者が又とあらうか？身を切る樣に冴え渡つた冬空の月を眺めて，嗚呼寒い哉と手を縮める前に，「天の原，ふりさき見れば」と云ふ句を思ひ出せば，先づ先きに手が出る事と思ふ．比叡颪しに雪雲が流されて，一しきり吹雪を撤いた後には，又前の樣に澄み切つた寒空になる此の冬の夜に，「君が爲め春の野に出で若菜つむ」思ひ切なるあり．其君は遙へど君には變りなし，君の在ませぬ人ぞ悲しきぞ，そゞろ涙沸然と下らぬ迄も，憂鬱になつて「ワタシ此頃變なのよ」てな事にならぬとも限らぬが，花山子は此處に一つの大なる喜びのお知らせをする事を大いに欣快とする次第であるんである．そは知る人ぞ知る．彼の本會觀測部に屬する黃道光の顧問閣下にして，且 J.A.V.S.O. の總元締りにあらせられる，稻葉先生におかれましては，此度目出度く「かさゝぎの渡せる橋を」お渡りあらせられた世にも目出度き "Happy end" ではある．從つて天上の織女と牽牛の如く，此れから何國も往復されるのではなくして，人の世では只今はスピード時代でありますから，も早はやかさゝぎも橋も全然必要ではなく．今は只御二方の希望に燃ゆる輝いた前途があるのみである．此處に於いて花山子は更めて，誌上を借りて厚くお祝ひ申し上げ，ひいては其華やかなる前途に邁進されん事を專ら御祈りする所以である．——雪は降る，花山の夜——ペチカは燃える，アカアカと——ペチカ燃えろよ．お話ししましよだ．今夜も寒いのに稻葉先生の靴音が聞える．天の川に霜が降る頃になれば冬の夜は更ける．遠く近く，雪に光る二條の線路を，音も無く辷る列車の汽笛が響くにつけても，トランシツトには次ぎ次ぎに星が通り去る．星がワイヤーを通る度びにシンクロノームは一秒一秒セコンドを刻む．やがて子午線館の屋根が閉まる頃になれば，稻葉先生の靴音は次第に霜柱に消えて行くのである．——風寒けれどペチカは燃ゆる，何時までも花山の夜は．——

（花　山　子）